



再び悪夢は見たくない

須田 鉄造

沖繩の戦況が日増しに不利を伝え、B29による本土空襲近しの噂が巷に飛ぶ頃、常勝関東軍を誇示していた在満皇軍は、北辺防備の任務を離れて、秘かに有蓋車で南方援護のため南下していた。その穴埋めに在満日本人大動員が実施され、開拓団本部の伝令は次々と飛んだ。内地のような壮行会もなく、ただ所轄の警察に出頭し、その場で日系兵事員から口頭で所属部隊名と所在地を伝達され、家族にも知らせず列車に乗り込むのである。

それまで在満公共機関の能率低下防止のため、関東軍司令部から召集猶予の特別措置で、在満日本人学童の教育に精進していた私にも、二十年七月遂に召集令状が来た。

多数の新設師団の一環として、私は吉林市に輜重部隊基幹要員として応召し、やがて煙筒山に移動して、後続応召要員と自動車輓馬の部隊編成に従事した。そして朝鮮系の学校を徴発して兵舎にあてたが、自動車もその他の車輛も馬も無く、支給する軍服もない有様だった。暫く一週間ほどして私服と着換えることができたが、渡された帯刀の鞘が竹製だったのには驚いた。

須田 鉄造

応召者は各機関の上級者や未教育補充者が多く、連日基礎訓練に目を暮らす状態であった。内地と異なり情報不十分のため北戦況も数日遅れで知られるのみである。私は師団命令で新京にある衛生材廠へ衛生材料受領に出張して来たが、その途初めに日本無条件降伏を知らされた。これは大変と急いでそのまま原隊に復帰すべき途に上った。途中日本兵を満載した列車が奉吉線に北進して来る。警戒し知らせず列車に乗り込むので駅で交換の停車中に「どこへ行くんだあ」と訪ねると「部隊は解散した。北朝鮮経由で内地帰還だあ」とはしゃいでいる。私も原隊復帰を見合わせ、急いで家族のもとへ帰ったが、その時はすでに原住民が暴徒化し、危険なので開拓団の父達と吉林に避難した。在満日本人学童の教育に精進していた私にも、二十年七月遂に召集令状が来た。九月吉林に進入駐屯したソ連軍司令官の布告で、終戦時在隊していたものは全員捕虜と海に投じられた。そして平山の元満州国師道大学に収容され、一週間休養後各地へ使役にかき出された。まず、京図線九站の航空燃料運び出しをはじめ、大豊満ダ弘発電所の取り壊し等である。いずれも重労働ではなかったが、天幕張りの幕舎生活で常背中の痛さとツミの襲来で眠れぬ夜はまことに辛かった。

最後は越冬物資を満載した客貨混成列車で北鮮経由で、揮春から東シベリアに入った。山あいの山もなくただ起伏が緩やかに果てなく続く平野に、関東軍が貯蔵していた戦時食料をソ連軍が占領し、それを自国の平野に輸送確保する作業だったのである。日本無条件降伏を知らされた。これは大変と急いでそのまま原隊に復帰すべき途に上った。九月の月明の夜、御守は寒かった。灌木を切りストロウの燃料とし、地をならして方錐形天幕を張り、立臥中組になつて毛布二枚を敷き、もう一枚を掛けて背中をくっつけて寝る。内地帰還だあ」とはしゃいでいる。私は、原隊復帰を見合わせ、急いで家族のもとへ帰ったが、その時はすでに原住民が暴徒化し、危険なので開拓団の父達と吉林に避難した。

のだ。

幕舎は煙が充満し、凍てついた土の冷え冷えとした寒さは体に突きささるように浸みこんでくる。敗れた祖国をあれこれ想像したり、吉林に残して来た妻子の苦難にみちた生活を思うと、疲れはてたからだでもなかなか眠れない。小用を催して外に出れば、夜半の月は玲瓏として輝き無情また一入である。

夜明けとともに作業が待っている。支給された握り飯一個を腰に下げ、髭とすすだらけの元兵士が、自動小銃を構えたソ連兵に監視されながら、黙々と作業場へ歩を運ぶ。彼らは「ヤッポンスキー」を連発して、延々と曲がりくねった道を見え隠れに占領物資を運んでくるトラックの荷下ろしと、野積みのノルマ達成に躍起となる。

旧日本軍の帯剣を拾って穀物の入った麻袋や箱をこわし、米・小豆・乾燥野菜等を持ち帰って空缶を利用して煮炊きし空腹を補う。

病人は続出した。使役に耐えられぬ者は琿春に下山させ、早期に治る見込みのない者はさらに満州国蛟河の仮病院に送る。私はこの機会を利用して脱出を試みた。使役一か月で蛟河へ送られた時のことである。ここは周囲を有刺鉄線で囲まれ、出入り口はソ連兵が監視していたが、構内の井戸が凍結していたので炊事班と使役だけは水汲みのおとき自由に出入りできた。私はこの仕組みと夕食時の混雑をねらって構内を脱出した。そして満人家屋に身をかくした。

仮病院の運営は日本将校に一任されていたが、点呼も無かったし、逃亡しても死亡と報告された。発疹チフスが発生し死者も珍しくなかった。死者が五体ほどたまると秋のうちに掘っておいた後方の大きな穴に放り込む。何処の誰かも不明のまま、白ろうの人の形のようになって成仏していた。

私の身を隠した満人家屋は大工職人を六人使っていた。私はそこで水汲みや薪割りをして働いた。満人自衛隊が逃亡者を探しに来たこともあったがうまくとりなしてくれた。一か月後その主人から過分な給料と居留民団から証明書を貰い、妻子の待っている吉林へ警乗兵に調べられながらも、一月下旬帰り着くことができた。

幸い妻子四人は無事で感激の対面ができた。満州で出生した愛児三人の霊を異国の地に残して、昭和二十一年九月佐世保港に上陸した。

十月一日、夢にまでみた懐かしの塚山駅に降りたのである。

(昭和五四年八月十五日)

「おらが村の十五年戦争」

山崎正治編著

(1988 昭和63年) より



小城在満国民学校玄関前 須田鉄造と揮毫